



山は我が人生

師であり、道場であり、職場であり、遊び場であり、また恋人でもある

良き道は、山を美しくし、人の心をも変える

有り難きかな 有り難きかな

この本は林業書でありながら、林業書ではあらずして、林業書なり

(橋本光治)

はじめに

令和五（二〇二三）年八月一日、「徳島県那賀町・橋本山林に見る、多様性豊かな森をつくる、自然との向き合い方」と題したイベントが開かれました。会場となったのは徳島県の「橋本山」。林業家の橋本光治さん、延子さん夫婦、息子の忠久さんが手入れをする森林です。その橋本山上に、コモンフォレストジャパンの坂田昌子さん、NPO法人地球守の高田宏臣さんが訪れ、生物多様性や土中環境など、それぞれの視点から橋本山を読み解くという試みで、前日と当日の午前中は、実際に山を歩き、午後からは近くのもみじ川温泉でオンライン座談会を開催しました。参加者はオンラインを含めると三〇〇人以上！ 幅員約二・三メートルの作業道に数十人の参加者が列をなして歩いている様子は不思議な光景でした。なぜここまで橋本山には人が集まるのでしょうか。

長引く木材価格の低下や担い手不足から、斜陽産業とまで言われる林業の世界。私自身、林業を生業としていて、ひしひしと感じるのは人々の「無関心」です。かく言う私も、林業家という職業に就く以前、東京で編集者として働いていた頃は、林業や森林にほとんど関心がありませんでした。なぜでしょうか。登山が趣味で山歩きはしていました。こと林業となると、つながる糸口があまりにも少なかつたのです。

林業の世界に身を置き始めてから、沸々と湧き上がってきた思いがあります。「環

境と経済」これがどうも林業の世界ではあまり両立できていないのではないかという疑問です。そんな時、橋本光治さんに出会いました。

橋本さんの山は、人を惹きつける。何度でも訪れたくなるのでしょうか、次から次へと来訪者が後を絶ちません。「無関心」という冷たい風が吹く林業界で、ここは温かい「関心」という無数の糸口で溢れているのです。実際に行ったことがある方であれば、共感していただけたらと思います。何より、橋本山を歩いていると本当に気持ちがいい。そして美しい。その山が、環境性と経済性を両立している。そんな理想郷みたいな山が橋本山です。

なぜ、橋本山はそれほどまでに人の心を惹きつけるのでしょうか。その答えは、森づくりに対する愛ある想いと、橋本夫婦と息子さんのお人柄にあると思います。この本は、橋本光治さんの人生を通して、橋本山の魅力の秘密を紐解き、日本の林業界への「関心」というピースを嵌め込む手助けとなることを目指して書きたいと思います。橋本さんと話していると、難しい林業専門用語はあまり出てきません。それより、人の道をどう生きるかという愛ある哲学で溢れています。林業だけでなく、人生において、私たちがどう生きていくのか、それを考えるきっかけになれたなら、こんなに幸せなことはありません。

発刊にあたって

はじめに、私たちが今日あるのは、申すまでもなくいろんな方々にご指導いただいたからであります。とくに恩師、大橋慶三郎先生には言い尽くせぬほど、大変お世話になりました。山づくり、道づくりは申すまでもなく、人の道について、薫陶をいただきました。先生は話を一〇されますと、山のこと、道のことは二つほどで後の八つは人の道のお話でした。そう考えますと、自然と人とは非常に深い関係でつながれており、人の道でわからないことや行き詰まったことがあれば、自然から学べばいいということがわかりました。

もう一人は養祖父であります。戦後の拡大造林に世の中が突き進んでいた時に、「これはあまりよくない」と反対をしていたということを県の職員の方からおうかがいしたことがございます。その様な考えの人でしたので、自山は尾根、支尾根（畝）筋には、マツ、モミ、ケヤキ、シイ、カシなどの樹種を主とし、その中にスギ、ヒノキがあるという天然の混交林仕立ての山にしております。これが防風林の役割を果たすと共に、林内の乾燥や地味ちみの低下を防ぎ、これにより長伐期施業が可能になります。私が仕事を始めて間のなき頃、細い雑木を一本伐ろうとしていた時「その木も何らかの役割をしていますよ。大事にしなさい」と養祖父に諭されました。神仏がつくりしものに無駄はない。何らかの役目をしている。その後は活かすことを考えるようになりました。

このような自然に近い山づくりは、経済性も公益性も高い調和のとれた癒しのある山となっております。これからおわかりかと思いますが、やはり人は、良き人との出会いが非常に大事であります。

私が目指す林業は、いかなる時代がきても経営が成り立ち、経験や年齢、性別に関係なく誰もができる林業です。そのために必要なのは、作業道と身の丈にあつた機械化です。やはり人の道と同じく、林業経営でいちばん大切なのは（作業）道でしょう。道があれば何とかあります。逆に、道がなく、入れない山は今の時代、自分のものであつて自分のものではありません。

素人である私が林業を始めた際、多額の相続税を背負いながらも、先祖や養祖父がつくつていた理想の山をもう一度つくり直すことに決めました。非常な試練も受けましたが、今となれば良き思い出となっております。その試練により得たものもたくさんありました。ありがたいことです。

この本をお読みいただいて、これから林業を始める人が増えてくれることを願っております。

橋本 光治

はじめに 2

発刊にあたって（橋本光治） 4

序章 豊かな人工林が地域を救う…………… 9

「林業」の風景を想像する 10 ひっくり返されたイメージ 13

豊かな人工林が地域を救う 16

1章 日本の森ってどうなっているの…………… 19

森の国と木使いの文化 20 木材利用と林業の歴史 23

五〇年で回す林業の始まり 26 補助金と自立する林業 36

皆伐とモラル 39 森は畑なのか 40

橋本さんの山づくり 42

2章 橋本さんの林業人生…………… 43

父の教え 44 橋本家に入る 50

脈々と続く橋本家の歴史 53 陰歳翁の山づくり 58

橋本山を継ぐ 60 赤ん坊が全力で走り出す 77

大橋慶三郎氏との運命的な出会い 79

作業道づくりが始まる 80 大橋先生の言葉 84

夫婦二人三脚 93 教えることを始める 95

3章 自然と調和する美しい山づくり…………… 97

不思議な山 98 経営方針の三本柱 100

長伐期の山をつくるために 102 自然に馴染む道づくり 105

作業道は美しい山づくりのためにある

道ができてスギが復活 113

石を積む 118

息子への教えはたった三つ 132

家族経営こそ最先端 138

生き物に優しい山 144

自然の力を利用してもらう
いくつかの実験 119

三者三様 134

人生に効く橋本語録 140

山に癒しを 147

4章 広がる想い

全国を飛び回る日々 162

島根県益田市匹見町 169

徳島県美波町 四国の右下木の会社

高知県の町 岡田竜平さん 188

福井県福井市 宮田香司さん 163

石川県金沢市 飯島さおりさん 176

吉田基晴さん 180

しなやかな人 190

5章 森は誰のものか

森林と所有 194

森を共有していた時代 197

放置林と行政の介入 201

所有と譲渡 211

所有の始まり 195

近代的所有権の発動 199

自然に線引きをした代償 203

山に誰もが入れる権利 213

6章 「林業」の枠を超えて

継続のなかに変化を

一〇年後を見据えて 221

観光としての新しい林業 218

訪れる人との関わりのなかで 222

終章 豊かな森を継ぐあなたへ……………249

自伐とは 250

意思を相続する 255

子を育てるように木を育てる 263

人生の道標 269

林業は殿 254

借りを次へ返す 259

生きる森 265

林業は恩送りです（岡橋清隆） 272

おわりに 274

参考文献／参考資料 277

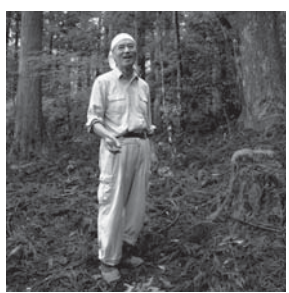
コラム

じいさん秘伝の書 66

研究者の視点から見る橋本山 122

一〇〇年の森を一〇〇年のカメラで写す 150

スペシャル対談 高田宏臣さん、坂田昌子さんと考える橋本山の未来 224



序章

豊かな人工林が地域を救う

「林業」の風景を想像する

皆さんは「林」と聞いて、どんな風景を思い浮かべますか。頭のなかで想像してみてください。次に、「森」はどうでしょう。どんな景色でしょうか。

皆さんが想像した「林」と「森」は、景色に違いがありましたか。なんとなく、「林」は同じ種類の木々が整然と並んだ風景で、「森」の方は、色んな種類の木々がこんもりと生えているイメージではなかったでしょうか。

さらに、「林業」となるとどうでしょうか。「林」の「業」と書いて「林業」ですので、想像した「林」の景色のなかで、「木こり」とよぶにふさわしい人物が、斧もしくはチェーンソーで木を伐っている。そんな景色が思い浮かびませんでしたか。

私自身、林業を生業にする以前に、漠然と抱いていた「林」や「林業」のイメージはまさにそのような風景でした。ハイキングや森林浴、もしくは登山となると出てくる風景は「森」のイメージで、そのなかで「木こり」が木を伐っている姿は想像しづらい。童話の世界に出てくるような、帽子を被って立派な髭を蓄えた気のいい「木こり」が、斧を切り株に突き立てて佇んでいる姿の背景は「森」がいいのです。それが、「林業」となると、蛍光色の服を着たスラッとした容姿のお兄さんが、ヘルメットを被り、チェーンソーを持ってキビキビと仕事をしている。その姿の背景は「林」なのです。この想像上での差異

は、あくまで私の頭のなかのことですが、日本の林業を考える上では、結構大きなポイントと言えるのです。どういうことでしょうか。

林業の仕事の始まりは、木の苗を山に植えることから始まります（実際はその前に苗をつくったり、地拵え^{じごしえ}したりという作業があります）。これを植林、または植栽と言います。日本の林業の仕事は、スギやヒノキなどの人工林を「植えて、育てて、伐る」というサイクルで回しています。人工林というのは、その名の通り、人の手によって苗が植えられて育った木々が生える「林」です。スギやヒノキが多く植えられる理由は、優秀だからです。何が優れているかというと、第一に、真つ直ぐ育つということ。スギの語源は「直ぐ木（すぐき）」からきていると言われています。幹が真つ直ぐにすくすくと育つ様子からきているのです。ヒノキも真つ直ぐに育ちます。この二種類の木は共に、「針葉樹」とよばれるカテグリーの仲間です。葉の先が尖った形をしているからです。一方、葉が針葉樹と比べて広がっている種類の木を「広葉樹」とよびます。サクラやブナ、クスノキなどは広葉樹です。サクラの木を思い浮かべるとわかりやすいですが、枝が左右に分かれて葉っぱをつけていて、一本の木を全体で見ると横に広がった姿をしています。そのため幹は曲がったりよじれたりしています。スギやヒノキはさまざまな用途に使われますが、主な用途は建築材です。家を建てる時に使う柱や梁、土台に使う時、「真つ直ぐ生える」という特徴が活きてきます。



真っ直ぐに育ったスギ林



枝を大きく広げるサクラの木

第二の特徴は、加工がしやすいことです。スギやヒノキは比較的軟らかい性質を持つので、削ったり穴を開けたりが容易にできます。そして、第三の特徴は、日本の自然環境に適しているということ。スギは本州以南から屋久島まで、ヒノキは本州（岩手県以南）、四国、九州に分布し、共に日本固有種です。つまり、日本のほとんどの地域で育てられるということです。

真っ直ぐ育ち、加工が容易で、ほぼ日本全国どこでも育つ。こんな優秀な木々は他にありません。植えたくなる気持ちもわかりますよね。植える時には、その土地の特徴や環境に合わせてスギやヒノキなどの樹種を選びます。他に、例えば広葉樹の苗も一緒に植えようというのは一般的ではありません。基本的には単一樹種の苗を植えます。これは農業と似ています。農業もピーマンだけ、トマトだけ植えるというのが一般的ですよ。つまり、乱暴な言い方になってしまいますが、山を「畑」と捉えてひとつの樹種を育てていくという感覚です。ただし、植えた年に収穫できる野菜畑と違い、スギやヒノキが製品として「出荷」できるようになるまでには数十年という長い年月がかかります。もちろん出荷するまでは、木材での売上はありません。売れる時

がくるまで丁寧に育てるのです。

「林」は同じ種類の木が立ち並んでいる様子を言います。つまり、日本では、スギやヒノキを林業の仕事のもと、単一樹種で植林し、育てた結果できたものが「林」となります。話は戻りますが、だからこそ、「林業」と聞いて想像する風景にはスギやヒノキの「林」が映るのです。それが、私を含めて多くの方が想像するイメージではないでしょうか。

この本を手にした方の中には、ここまで読んで、何を今さらあたり前のことを言っているのだと思われた方もおられるのではないかと思います。しかし、その「あたり前」は本当に「あたり前」なのでしょうか。

ひっくり返されたイメージ

平成二十六（二〇一四）年、私は当時勤めていた東京の出版社を退職し、高知県へ移り、林業の世界に足を踏み入れました。雑誌の編集をしていましたが、仕事に不満があったわけではなく、子どもを授かり、三十歳を機に生き方を見直した際、自然に近い環境で生活したいという希望が出てきました。そんな時に出会ったのが「自伐型林業」という言葉です。林業の前に「自伐型」という聞きなれない言葉がついており、妙に気になりました。調べていくうちに、どうやら素人でもできて、自然環境にも優しい、その上儲かるらしいぞ。こんなやりがいのある仕事はないのではないかと、と気持ちが高揚し、まだ見ぬ「自伐

型林業」の世界を想像してはワクワクしていたのを覚えています。

私に移った先は、高知県佐川町さかわちょうという里山地域です。ここで、自伐型林業の普及と実践というミッションで地域おこし協力隊を募集しており、その一期生として採用されました。地域おこし協力隊というのは、総務省の事業で、都市部の働き手が地方に移り、その地域を活性化させるためのミッションにあたるというもので、最長三年間の任期のなかで、地域おこしの活動をします。つまり、三年間は給料をもらいながら、自伐型林業の修行ができる。これはいいぞと調子に乗った甘い考えは、ミッション初日、見事に打ち砕かれます。私が佐川町に来たのは十月。その前に四月からすでに協力隊として任務にあたっていたメンバーに連れられ、車に乗ること四〇分。道はどんどん狭くなり、辺りは鬱蒼とした林が延々と広がります。まだ着かないのかと心細くなりながらようやく辿り着いた場所で、最初に言い渡されたミッションが、山の斜面に置かれた丸太に斧で釘を打つ、というものでした。

今でこそ、この作業は、山の中につくる「作業道」という道の路肩を補強するために行う「木組み」というものだと知っていますが、当時は何のためにやっているのか説明はされても理解できない。しかも通常、釘はハンマーで打つものですが、その時はなぜか斧でした。釘も今まで見たこともないような長さで、これがなかなか打ち込めず、途中で曲げてしまう。長時間斜面にへばりついてるので、足腰が安定せず力も入らない。手伝って

もらいながら、ようやくその仕事を終えたら、今度はチェンソーの研修です。これが地獄のように重い。もともと華奢な体型で、今まで、パソコンのキーボードをひたすら打つという仕事をしていたので、チェンソーのエンジンを回して、横に構えてキープするということができない。想像していた世界と違うな。林業ってこんなにハード（実際はそこまでハードなことではないのですが）な世界なのかと、出鼻を挫かれました。それでも、毎日自然のなかに入って体を動かす仕事は気持ちがよく、新しい土地に新しい仲間、新しい仕事と初めてづくしということもあり、あつという間に月日が過ぎていきました。この時はまだ、林業は「林」のなかで行う仕事だと思っていましたし、実際にそうでした。

協力隊二年目の冬、転機が訪れます。かねてから佐川町に講師としていらしていた徳島県の橋本光治さんの山を見学しに行く機会がやってきたのです。車に揺られ、四時間ほど到着した先では、橋本さんの他、延子夫人、息子の忠久さんが出迎えてくれました。そして、早速山を案内していただいたのですが、一歩足を踏み入れた途端、あまりの衝撃に息をのみました。

「美しい」

その一言だけが頭に浮かびます。頭に、というより、身体を通して、心にまで染み入ってくる美しさ。そう言った方が正しいかもしれません。そこには、樹齢一〇〇年を超える大きくて優しい森が広がっていました。そう「森」です。立派なスギだけでなく、クリ、



調和の取れた作業道

サクラ、ケヤキなどの広葉樹の大木、その間には名前もわからない無数の低木、シダ類、苔にキノコ。複雑で多様な風景が織りなす見事なまでの空間。そこに、一本の作業道が通っています。その道が、周囲の森と完全に調和しているのです。道だけが浮くことなく、風景の一部として昔からある。それほど自然なのです。そして、その山で、橋本家は代々、「林業」を行っている。「森」のなかでの林業を生業としているのです。今までの「林業」に対する私のイメージはあっけなく、清々しいまでにひっくり返りました。

豊かな人工林が地域を救う

山に流れた雨は、土に染み込み、川となり、里へと流れていきます。裾野には、田

畑が広がり、民家がぼつぼつと佇む。日本に昔からある里山の風景です。里に流れた水は、やがて大海へと続いていく。すべてがつながっていて、連鎖している。そんな循環の世界では、山や森、林は、裾野に広がる里の暮らしと切り離すことはできません。林業家はこの循環を忘れてはいけません。自分たちの仕事は、そこからつながるすべての生きとし生けるものに影響を与えている。山を守ることが仕事で、山を壊すことなどあってはならない。では、山を守るためにはどうすればいいのでしょうか。ここで、いくつか考え方が枝分かれしているようです。日本の山林の現状について、この後の1章で詳しく述べますが、手入れ不足の山が多いのは確かです。手入れがされていない山の木は、ちょうど植えてから五〇年以上経って木材として使える樹齢になつていたので、一度すべて伐つてしまつてもう一度植え直し、手入れをし直そう。それが環境にいいことだという意見もあります。「皆伐・再造林」^{かいぼつ}一度すべて伐つて、植え直す。これが今の日本の林業の主流です。しかしこの方法は、うまくいったりいかなかったりしているようです。想像してみましよう。山に降つた雨は、木々の葉っぱにあたつて一部は蒸発し、一部は枝や幹を伝つて静かに地面に吸収されます。地面のなかでは、根っこが土を掴み、ふかふかの土壌がスポンジの役割を果たして水を蓄えます。大雨が降つても、すぐに水が大量に流れないのは豊かな森林があるおかげです。それを無くしてしまうとどうなるでしょうか。降つた雨は、その勢いのまま地面を叩きつけ、土を掘り、乾燥して浸透力を失つた土壌の上を水が土砂と共に滑

るように流れます。川床が上がった川に大量の水が流れ込む。裾野には私たちが暮らす里山が広がっています。

もちろん皆伐施業がすべて悪だとは言いません。斜面の緩やかな場所で、適切な方法を用い、適切な再造林を行うのはいいと思います。「林業」の目的は、木を植えて育てて伐る(収穫する)ことです。問題は、その目的の達成のためだけにしか考えが及ばずに、そこから派生するさまざまな問題に目をつぶってしまうことです。山や森林が持つ多様な役割を無視し、経済性だけを追求した林業を続けていくと、いつか取り返しのつかないことになってしまう気がするのです。

では、どうすればいいか。その答えが、橋本山にあると思います。人工林なのに、天然林に近いような豊かな森を長年にわたり維持してつくり上げていく。経済性と環境性を両立した山づくりを伝承していく。豊かな森は多様な生命を育み、美しい水を裾野に届け、里に暮らす人々の命を満たしていく。豊かな人工林が地域を救うのです。

橋本山の詳細をお届けする前に、日本の林業は今どうなっているのか、その歴史を振り返りながら、簡潔に見ていこうと思います。